

地小出版
方小版

情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 139円)
	年間 1,500円(税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 ㈱地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

一人だけの出版社「旅と思索社」を設立 人生を旅と捉え、さまざまな テーマと格闘していきたい。

文・旅と思索社代表 廣岡 一昭

昨年5月にわたし一人だけの出版社「旅と思索社」を設立した。

社名にはわたしの思いが二つ込められている。一つは「旅から学ぶ」こと。わたしが人生の岐路で思い悩むとき、それを救ってくれたのはいつも旅だった。未知の世界を旅することで、生き方に前向きに働きかける力を信じたいと思ったからである。

二つ目は「思索する」ことである。スピーディーなコミュニケーションを常に求められ、ネットではいともたやすく自分の感情を表現することができるようになった今こそ、わたしたちはさらに深く考える必要があるのではないだろうか。これは若き日のわたし自身の軽率な人生に対する戒めでもあるのだが。

出版の世界に心ひかれる

バブル崩壊後の就職難が続いていたおおよそ20年前、音楽の道で挫折し、5年もフリーターを続けていたわたしは、高いローンを組んで買ったMacでDTPを駆使し、履歴書を大量生産していくつもの企業に送っていた。それが段ボールやパッケージを手掛ける取次の関連会社の目に留まり、声がかかった。版下からDTPに急速に移行していた時代。その知識を買われたのだった。出版に関わる仕事ができる心が躍った。

営業部員として出版社への本の化粧箱、書店POPなどの制作に勤しんだ。たくさんの人びとといっしょに形あるものを作り上げていく楽しさや喜びを



二十世紀酒場1 東京・さすらい一人酒 / 多田欣也 絵・文 / 旅と思索社刊 / 2015年10月発行 / ISBN978-4-908309-01-4 / 税込価格：1,620円

初めて味わった。

そして出版社の多くが小規模経営の零細企業だと知る。しかも大手出版社に負けない、質の高い本を発行しているところがたくさんある。出版する機会や評価が平等に与えられている素晴らしい世界に心ひかれた。

その後は総務部に異動し、ものづくりからは遠ざかった。健康問題で会社を辞め、心機一転、路線バスの運転士になった。だが長続きはしなかった。皮肉にも自分は「本作りがしたい」ということがはっきりしたのだった。

業界紙の記者としてこの世界に戻り、その後、校正会社の子会社の出版社に転職。初めて得た編集の仕事だった。しかしすぐに営業責任者が病で退職し、後任を打診される。編集者で会社を創業した相談役のMさんから「編

集は仕事と別にゆっくりやればいい」という言葉に慰められ、その要請に応じた。

それでよかったのかもしれない。特殊な商慣習、仕入部数の交渉、書店営業、改装、搬入、棚卸……、本が毎月確実に書店に並ぶために必要な作業を手探りで一つひとつ身に付けることができた。気がつけば編集制作からマネジメントまで携わるようになっていた。そんな折、出版とは全く関わることのない、某印刷会社への2度の出向命令。「自分一人でやってみよう」。退職を決意した。

起業をして、会社経営には総合力が必要だということが分かってきた。一人の場合はなおさらである。そして、自分自身との対話と決断が必要だということも。

肯定するところから考えてみる

初めて、自分には何ができて、何ができないのかを真剣に考えるようになった。得意とするのは何か、強みは何なのか。今までの経験がわたしを救ってくれるようになった。そして、回り道ばかりして無駄に過ごしてきたと思っていた人生をもっと肯定してもいいのかなど、思えるようになった。

もし難しい問題に直面したら、経験を棚卸ししてみる。できないと否定するのではなく、肯定するところから考えてみる。そうやって自分にしかできないやり方を導き出せるよう努力している。

あらためて言うまでもなく、出版産業を取り巻く環境はますます厳しい。さまざまな意見はあるが、一人で小規模出版社を継続していくためには、自社出版物の売上とは別に採算を確保する経済的基盤も必要だとわたしは考えている。

現在、ご縁があって、雑誌創刊47年を迎えた小さな版元で月刊誌と書籍

の営業実務と、定期購読者管理などの事務処理業務を受託している。社長に社員一人という限られた環境の中で、わたしのこれまでの経験を提供しながら、雑誌の営業・制作という新たな経験も身に付けさせていただいている。

今、わたしにとって優先順位の高い大切な仕事は、自ら足を運んで人と出会うことだ。新たな出会いで未知の世界が開け、知的好奇心が刺激される。時間がかかってもそれがいつの日か本作りに結び付くと信じている。

ネットで知らない世界を探り当てることは簡単だが、それを自分の世界として取り込みたいのなら、勇気を持ってリアルな世界に飛び出し、人間の息遣いを感じなければならぬと自分に言い聞かせている。

それが実を結んだのが今年の10月に刊行した初めての書籍『二十世紀酒場(一)』である。わたしの会社が入居する、神田神保町からほど近い官民連携のシェアオフィス「ちよだプラットフォームスクウェア」の懇親会で知



街歩きをしながら、著者がイラストを残したお気に入りの酒場は、およそ二十年で200軒を超えた。本書ではそのうちの80店、年明けに刊行予定の下巻と合わせて約160店を紹介する。

り合ったSさん。雑談で面白い冊子を作っている先輩のお話を偶然聞き、お会いしたのが著者の多田欣也さん。園

芸家として個人邸の庭園設計、東京タワーやスカイツリーのイルミネーションなどのデザインのほか、幅広く活躍されている。

20数年都内の酒場を飲み歩き、消えゆく店のたたずまいや感想などを記した手書き絵を拝見し、お人柄を感じて、ぜひ残したいと思ったのが本書出版の原動力となった。出来上がったばかりの本を初めて手にしたとき、過去に仕事で関わってきたどの本よりもわたしにはいとおしかった。

「旅行ガイドの出版社ですか」とよく聞かれるのだが、具体的な「旅行」だけをテーマにするつもりはない。人生を旅と捉え、さまざまなテーマと格闘していきたい。

小規模出版社として失敗を恐れず、希望の道標を未来に残したいと思う。誰もができないと思っていることへの挑戦——経営のみならず、わたしの人生のテーマにしていきたい。

(ひろおか かずあき/旅と思索社代表)

新刊ダイジェスト

※価格は税込(消費税率8%)表示です。

『雨森芳洲と朝鮮通信使 —未来を照らす交流の遺産』 ●長浜市長浜城歴史博物館編



朝鮮の外交使節団である通信使は、1423年足利義持將軍の世に始まり、江戸時代だけでも12回を数える。中でも家康は、秀吉の出兵で悪化した関係の修復に腐心し、善隣友好の機会とした。日朝は古くから対馬藩を介して関係を結んできた。近江長浜の人である儒学者雨森芳洲は、同藩に朝鮮御用支配役佐役として仕え、生涯を日朝外交に尽くした。

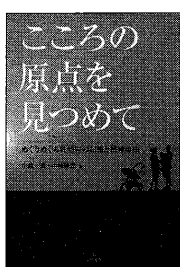
本書は本年、長浜市で開催された企画展とシンポジウムの記念誌で、朝鮮出兵のきっかけともなった国書「明王贈大閤冊封文」をはじめ、芳洲

の上申書「交隣提醒」、市内庄屋の「御用覚」、円山応挙が一行の行列を描いた「琵琶湖之図」などの史料図録と解説、年譜、展示資料目録からなる。芳洲は誠信(誠意と信義)外交を信念とした。素晴らしい国際感覚であり、その思想は今日の日韓関係に大きな示唆を与えるものである。

現在、両国で関係資料のユネスコ世界記憶遺産登録への取り組みが進んでいる。大変に意義深いことと思う。

◆1944円・B5変形判・135頁・サンライズ出版・滋賀・2015/9刊・ISBN・9784883255788

『こころの原点を見つめて —めぐりめぐる乳幼児の記憶と精神療法』 ●小倉 清/小林隆児著



本書は昨年の西南学院講座 in Tokyo『乳幼児期体験とこころの臨床—現実と記憶の中の乳幼児期』での、児童精神科医の小倉清氏と、『関係』からみる乳幼児の自閉症スペクトラム』(ミネルヴァ書房)の著者、小林隆児氏の講演や対談を中心に編まれている。ここで小林氏は、発達障害の見方に革新的な見解を提示している。発達障害への一般の理解は何らかの脳機能の異常によるというものだが、小林氏はその見方を退け、乳幼児期の母子間の営みにその解明の鍵を見出すのだ。その〈関係〉の在り方が、脳に

不可逆的な影響を与えている可能性がある。

一方の小倉氏は、医学生だった60年前、精神科では意外なことに子どもについて考えることなんてあり得なかったと言い、そこから患者とともに子どもの頃の写真を見ながら「乳幼児期のことを思い出して、ああだったこうだったと言って興奮したり涙を流したりすること自体が治療だと思う」とする独自の精神療法を披露する。

◆2052円・四六判・157頁・遠見書房・東京・2015/9刊・ISBN・9784904536995